Chudai NEWS

「Student Professors」のメンバー 。（写真左から）リーダーの澤田殊風さん、メンバーの林蒼音さん、渋谷海翔さん、大川内詩英奈さん、小川礼夢さん、加賀谷彩乃さん、保地菜々穂さん、橋本真緒さん、大塚史温さん、飯野桜太さん

「無限の思考で量を書く」「一つの言葉から連想、アイデアを広げる」

宣伝会議賞・学生対抗で「総合1位」受賞 1次審査通過のコピーなどが最多

国際経営学部・飯田ゼミ生のチーム「Student Professors」

コピーライターの登龍門といわれる日本最大規模の公募広告賞「第63回宣伝会議賞」（月刊『宣伝会議』主催）の「学生チーム対抗企画」で、国際経営学部の飯田朝子教授のゼミ生10人で作るチーム「Student Professors」が総合１位となった。応募したキャッチコピーなど8458本のうち45本が１次審査を通過、応募38チーム中最多となり、栄冠を勝ち取った。

受賞は2026年１月に発表され、チーム代表の澤田殊風（ことかぜ）さん（４年＝受賞時３年）は「思考を止めずに“量”を書く。その中で“質”も重視して、光るアイデアを探していきました」と創作上の工夫を話した。澤田さんと、チームメンバーでゼミ長の小川礼夢（らいむ）さん（同）に、受賞の喜び、創作過程での苦労、言葉を紡ぎだすヒント、飯田ゼミで学ぶ意義や面白さなどを尋ねた。

表彰セレモニーに参加したメンバーたち。後列一番左はYKK APの竹林賢汰さん、前列一番左は飯田朝子教授

チームリーダーの澤田殊風さん（右）と小川礼夢さん

応募8458本、うち45本が1次審査通過

学生チーム対抗企画への応募に備え、ゼミ生たちは夏休み中の9月に2泊3日の合宿を行った。小川さんによると、「一人1000本書くまでは帰れません」と冗談交じりに声をかけ合い、個々にひたすら創作に集中する時間の一方で、「会話する中で、誰かの言葉から連想してアイデアが広がっていく」という経験もした。澤田さんは「書きまくっているときに、ふと言葉やアイデアが下りてくる瞬間があった」と振り返っている。

滞在先は海沿いのホテルで、澤田さんは「近所に出歩いて気分転換を図ったり、景色の素晴らしさから、刺激やひらめきを受けたりすることがあった」とも打ち明けた。小川さんは、「たとえば、ある商品を使った感想を言語化する

過程こそがコピーライティングのやりがい」と説明し、「普段あまり使わない言葉も意識したところ、語彙が広がっていく感覚が楽しかった」と、創作の面白さを教えてくれた。

脳を自在に働かせ、言葉と向き合う

合宿で、全員が脳を自在に働かせ、言葉とひたすら真摯に向き合い、マジックのように紡いでいったことが今回の受賞に結びついたといえるだろう。最終的に10人で応募した8458本のうち7～8割を合宿中の創作が占めたという。

受賞について、澤田さんは「合宿の成果です。『無限の思考で量を書く』という志を皆で共有し、言葉と真剣に向き合ったことと、個々のパッション（熱情）が伝染して皆に広がり、努力が結果となった」と喜び、小川さんも「（宣伝会議賞に）3度目の参加で、初めて結果として実った」と笑顔を見せた。

1次審査を通過したのは、協賛企業の一つ「YKK AP」の課題「社会を幸せにするYKK APについて表現するアイデア」に応募した澤田さんの作品「『ただいま』と、『いってきます』の、あいだ。」や、「中小企業が平松剛法律事務所と顧問弁護士契約したくなるアイデア」の課題に応募した小川さんの作品「それは問題ではなく、交渉の材料です。」など。澤田さんの「YKK AP」の作品は協賛企業賞も受賞した。

☆澤田殊風さんの
1次審査通過作品（協賛企業賞）

課題：
「社会を幸せにするYKK APについて表現するアイデア」

「ただいま」と、
「いってきます」の、あいだ。

☆小川礼夢さんの
1次審査通過作品

課題：
「中小企業が平松剛法律事務所と顧問弁護士契約したくなるアイデア」

それは問題ではなく、
交渉の材料です。

合宿中は花火も楽しみ、リラックスしました

☆総合1位を受賞したゼミ生

リーダー： 澤田殊風さん
メンバー： 林蒼音さん、渋谷海翔さん、大川内詩英奈さん、小川礼夢さん、加賀谷彩乃さん、保地菜々穂さん、橋本真緒さん、大塚史温さん、飯野桜太さん

渋谷海翔さん（受賞時4年）以外は受賞時3年生

☆宣伝会議賞

60年以上の歴史を重ねた公募広告賞で、企業・団体が商品やサービスの認知向上などを促そうと提示する具体的な課題を題材として、キャッチコピーや動画広告、音声広告をプロ、アマを問わずに募る。今回の一般部門は30の企業・団体が課題を提示した。例年、60万件近い応募があり、1次審査通過率は1％未満とされる。

18～25歳の大学生、大学院生、専門学生のチーム（2～10人）が対象の「学生チーム対抗企画」は12回目の開催。課題は8月1日に発表され、38チームが参加した。メンバーが投稿した作品の1次審査通過本数の合計数を競い、応募8458本のうち45本が通過した飯田ゼミ生10人（2025年度の3、4年生）のチーム「Student Professors」が最多となった。

合宿中、皆で海を眺めて気分転換も図りました

「想像を超えた創造をする」ゼミ仲間たち

澤田さんと小川さんの２人は２年生のときから、飯田ゼミで多種多様な広告について学んでいる。日本だけでなく国外で注目されるような英語の広告も学修の対象で、小川さんは「海外のポスターはシンプルで、パッと見た瞬間にイメージが伝わるのに対し、日本は言葉での説明が勝っているポスターが多い」と違いを話す。

ゼミでは、そうした自身が学んだ広告を題材として、ゼミ生によるゼミ生を対象とした講義が行われている。題材はテーマパーク内の広告、映画ポスターなど、さまざまだという。チーム名の「Student Professors」もこの講義が由来だ。澤田さんは「日頃からグループワークやプレゼンテーションが多いゼミで、私の想像を超える創造をしてきてくれるゼミ生ばかりです。多種多様な学びから刺激を受けています」と、仲間たちに感謝する。

指導する飯田教授は自身のインスタグラムで、「（９月の合宿で）脳にたっぷり汗をかきました。素晴らしい頑張りでしたね。飯田ゼミ始まって以来の快挙です！おめでとう」と、教え子たちに称賛の言葉を送っている。

動画CM「あなたの学びも、きっと見つかる。」より

Chudai NEWS

「学生を優しく もてなしてくれる街」 詩的な映像と言葉で表現

学生CMコンテスト 八王子市長賞にドローン研究会

中央大学ドローン研究会（会長：黒島康介さん＝文3）の作品「あなたの学びも、きっと見つかる。」が八王子学生CMコンテストで八王子市長賞を受賞した。同研究会としては前年度の作品「悠久の時が流れる、この場所で」の審査員特別賞に続く2年連続の受賞となった。会長の黒島さんは「受賞は光栄でうれしい。日頃の活動のモチベーションにもつながります」と喜んでいる。

AIのナレーション「鳥のさえずり」「川のせせらぎ」の効果音

八王子市長賞を受賞した「あなたの学びも、きっと見つかる。」は2025年11月の計6日間、市内29カ所をロケーションハンティングの対象とし、ドローンによる上空からを含め、八王子城跡や高尾、南浅川などを撮影したさまざまな映像を編集した「詩的な映像と言葉で描いた」作品だ。

研究会の会員全員（当時17人）が撮影、編集、ナレーションなどの業務を手分けして、約2週間をかけて制作した。会長の黒島さんと前会長の岡大空（そら）さん（経済4）、副会長の石原和鷹さん（同）、久武正馬さん（2026年3月卒）の4人が撮影を担当し、29のスポットをシェアサイクルに乗って撮影して回った。黒島さんは「体力勝負でした」と笑顔で振り返る。

自分を見つめ直したいと願えば、神社や城跡が寄り添ってくれる。

「八王子で学ぶ」をテーマに、多摩キャンパスがある八王子の魅力を学生の視点で30秒の動画に表現した作品を募集する2025年度の「八王子学生CMコンテスト」で、中央大学の学生団体、チーム３組が入賞しました。うち２組に受賞の喜びなどを聞きました。入賞作品は東京・新宿の大型ビジョンで放映されるほか、PRコンテンツとして活用されます。

コンテストは、八王子の多様な魅力を学生が知り、愛着を持つきっかけとしてもらうのが目的。中央大学を含む地域の大学や企業、団体、自治体など32の加盟団体が連携し、魅力あふれる学園都市に向けて活動を展開する「大学コンソーシアム八王子」が主催しています。

動画CM「あなたの学びも、きっと見つかる。」より

中央大学ドローン研究会会長の
黒島康介さん

深呼吸したいと感じれば、黄金の並木や滝山の豊かさが迎えてくれる。

そう、学園都市八王子は訪れる人を優しくもてなしてくれる。

あなたの学びもきっと見つかる。

（動画ＣＭ「あなたの学びも、きっと見つかる。」より）

AIの合成音声によるナレーションに加えて、効果音として、「川のせせらぎ」「鳥のさえずり」、風の音などを取り入れた。2026年２月に開かれた表彰式では、「（効果音が）八王子らしい“落ち着き”を表している」と、審査員に高く評価された。

主にドローンの上空からの映像で構成された前年度の受賞作に対し、今回は川のせせらぎと、高尾に日が没するエンディングのシーンの２～３秒にドローンの“活躍”を抑えた。とはいえ、ドローンが映しだした南浅川の美しい水の流れと光の反射を捉えたシーンは「どうしても外したくない映像」（黒島さん）だったという。

「ドローンといえば中央大学」へ

今回の応募を前に、テレビCMを研究したという黒島さんは、「たいていのCMには、効果音、BGM、ナレーションの“３点セット”が含まれている」と気づいた。もちろん、この視点は受賞作に反映され、受賞の要因の一つになったと捉えている。40時間以上という総撮影時間の中から30秒の作品へと映像を厳選する中で、取捨選択の悩みを経て、自信作として応募した。

ドローン研究会は2023年に設立された、まだ“若い”サークルだ。今後の活動について、黒島さんは「ドローンのサークルといえば中央大学といわれるくらいに活動を充実し、発展させていきたい」と意気込む。充実した活動を継続していくためにも、コンテストなどへの応募が活動のモチベーションの一つになっているという。

中央大学ドローン研究会

2023年4月発足。黒島康介会長（文3）。会員数17人（2025年度）。ドローンの操作技術の向上を目的に、毎月の飛行会や年３回の特別飛行会、合宿などの活動を実施。後楽園キャンパス新１号館のドローンによる撮影とYouTubeでの公開や、ドローン撮影した中大の運動部の活動のYouTubeでの公開など、多彩な活動を展開している。

動画CM「21歳、八王子から∞の可能性」より

Chudai NEWS

「21」に込めた無限の可能性 学びも仕事も… 十人十色の選択肢のある街

八王子学生CMコンテスト 国際情報学部・村田ゼミ生4人に審査員賞

「八王子で学ぶ」がテーマの2025年度「八王子学生CMコンテスト」で、国際情報学部の村田雅之教授のゼミ生4人の作品「21歳、八王子から∞の可能性」が審査員賞を受賞した。ゼミ生たちは「学びとは机に向かうだけではない。日常にも溶け込んでいるもの」「地域全体が多様な学びの場になればいい」といった思いを込め、制作に取り組んだ。4人のうち、小山公那（ゆきな）さんと奥平成美さんに、受賞の喜びや制作上の工夫、苦労などを尋ねた。

市の木「イチョウ」の葉を活用 1日だけの撮影に万全の準備

受賞したゼミ生は、小山さん、奥平さんと、相方（さがた）彩音さん、青木世仲さんで全員が4年生（制作・受賞時は3年生）。4人の年齢と、八王子市内の大学・短大・高等専門学校の数（21校）、いちょう塾（八王子学園都市大学）の開学21周年。これら「21」という数字の偶然の重なりが制作の出発点となった。

30秒の動画CMは、市の木、イチョウの色づいた葉を組み合わせて「21」の数字をかたどったシーンから始まる。続いて、葉をかたどった紙の表と裏に、八王子で「学んだこと」、仕事などの「今していること」を書いた21人が登場し、八

審査員賞の受賞を喜ぶゼミ生たち。（左から）奥平成美さん、青木世仲さん、村田雅之教授、相方彩音さん、小山公那さん

王子に多様な学びと、学びの場が存在していることを伝えてくれる。ただ、それらは、実際の経験や職業、行動などと異なり、演出上の表現として動画化されている。

一番手で画面に現れた奥平さんは「八王子で見つけた未来」のナレーションに合わせ、表面に「友達に高尾山を案内して地元の魅力を伝える楽しさに気づいた！」、裏に「高尾山ガイド」と記した葉を手にしながら笑顔を見せた。

撮影場所は市街地の商店街や「八王子ラーメン」の看板のある店先、「桑都日本遺産センター 八王子博物館」（愛称・はちはく）と高尾山。個々に就職活動の都合もあり、市ヶ谷田町キャンパスに通学するメンバーがそろって八王子での撮影に臨めたのは１日のみ。それだけに万全の準備で臨んだという。

主な役割分担は、小山さんは撮影対象の選定や調整役を務め、撮影の技術面は相方さん、編集は青木さんが担当した。４人が出し合ったアイデアやコンテをまとめ、全体の方向性を定めていったのが奥平さんだった。

八王子「誰にも魅力ある街」受賞は「協力してくれた人への恩返しにも」

小山さんは「学んだことを生かせる場も八王子にある。その選択肢があることを知ってほしかった」と映像への思いを説明する。八王子について調べる中で、４人は、学生の卒業後の市外転出などの影響で定住率がそれほど高くないことを知った。奥平さんは「地域全体を学びの場とし、社会人になっても住み続けるような街になってほしい」と語り、誰にも魅力ある街という意味合いも映像に込めたという。

制作でのやりがいや苦心したことを尋ねると、小山さんは「30秒の枠の中で伝えたいことを決める。それが難しかったのですが、こだわり切った構成をアウトプット（形に）できた」と振り返り、集中して取り組んだこの点に等しく、やりがいと苦労を感じたそうだ。

奥平さんは「『賞』と名の付くものは初めて。頑張った結果を評価していただき、自分の成長にもつながった」と受賞を喜び、小山さんは「（受賞が）出演してくれた国際情報学部の21歳の皆さんや八王子の地元の方々、撮影に協力してくれたお店や企業の皆さんへの恩返しにもなった」と話す。

小山公那さん（左）と奥平成美さん

２人は、ゼミの村田教授への感謝も忘れない。小山さんは「動画を初めて見た人にどう伝わるか。他者にどう伝わるかに対する意識の大切さ」を、奥平さんは「自己満足の作品になってはいけない。常に客観視しながら制作する重要性」をとくに指導されたという。

◇

小山公那さんと相方彩音さんは、同じ村田ゼミ生の笠井颯太さんと樋口萌さんの計４人で、2026年１月に表彰セレモニーのあった「第14回OAC学生広告クリエイティブアワード2025」でも、映像作品「一緒に食べると」が企業賞（明治賞）映像部門でグランプリを獲得し、二重の喜びに包まれた。

明治賞は、明治の商品「たけのこの里」「きのこの山」について、「未来の『どっち派!?』のカタチを表現した広告」が応募の課題だった。「一緒に食べると」は、同社から「描いていきたい未来が体現されている作品でした」と高い評価を受けた。